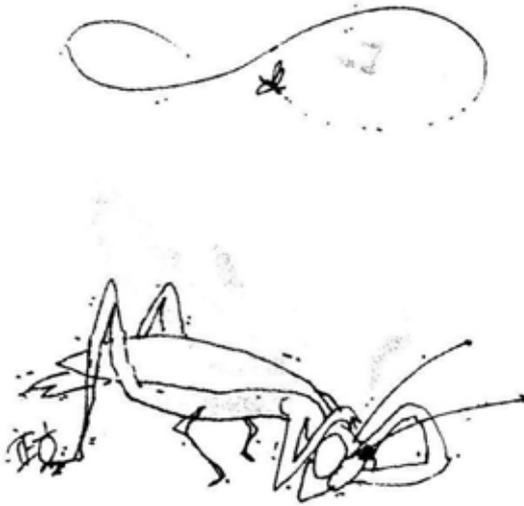


## カゲロウと殿様バツタ

### 第3編9章

真のキリスト者はいつでも来るべき世を瞑想すべきである。



私たちが悪人たちの悲惨な最期と私たちのために準備された来るべき世における驚くべき祝福をいつも忘れないようにしましょう。そうすればこの世の生活で出会う様々な迫害や災難がもたらす苦しみに耐えることができるようにされるのです(詩編73:3, 4, 17; イザヤ66:24; マタイ24:41; 黙示録7:17, 21:8)。ですから来るべき世に対する希望は旅人のようにこの世を歩もうとする私たちすべてに唯一で最大の慰めとなるのです。

「今日の楽しみはこれだけにして、明日また楽しもう」と殿様バツタはカゲロウに語りかけました。もうすぐ日が沈み、夜が訪れよとしていたからです。「明日?」殿様バツタの言葉に驚いたカゲロウは尋ねます。「明日って何。食べられるもの」。カゲロウの言葉に今度は殿様バツタが驚きます。「何だって、食べられるかって」。あっけにとられた殿様バツタはかげろうを見つめて語り続けました。「明日が...。明日が食べられるかって。バカなやつだな。お前、明日を知らないのか」。しかし、カゲロウはやはり首をかしげています。「明日って...」。それは今までの自分の生涯で一度も考えたことがない言葉でした。ところで、キリスト者は「明日、楽しもう」と言う言葉を語る事ができる者たちだと言えるのです。

第1節 神は苦難によって私たちのこの地上の生活に対する行き過ぎた愛着を捨てさせようとする。

私たちはこの世の生活を動物的な本能から愛しています。その愛着心はあまりにも強力で、自分では制御することがほとんどできないほどです。もちろん、人間は誰でも死の彼方にある世界に関心を持ち、永遠の命を手にする事を強く望んでいます。それを自分のものにしようと、それなりの努力をしているのです。そうでなければ人間は動物と異なるところが全くなくなってしまおうでしょう。

しかし、私たちの知性はこの世の栄耀栄華の外面的な輝きに簡単に惑わされてしまいます。また、私たちの心はいつでもこの世の生活に対するどん欲と野心、そして動物的な欲望に占領されて、天国の祝福を仰ぎ望む余裕がありません。結局、私たちの靈魂全体が様々な欲望に占領されて、ちょうど狂った動物のように地上の生活での幸福だけを追求しようとするのです。これこそ人間が陥りやすい最悪の落とし穴なのです。

しかし神は愛する子供たちがその悲惨な落とし穴に陥ることを見過ごしにはされません。そのために神は十字架の針で私たちを刺し通すときがあるのです。私たちに注意を促そうとされるためです。だからこそ神は私たちにさまざまな不幸が襲うことを許されるのです。戦争や反乱、略奪あるいはその他の災害によって私たちを苦しめ、不幸にさせて、私たちがこの世の生活に心全体を支配されないようにさせ、この世の生活の内には真の安息を求めることできないようにされるのです。

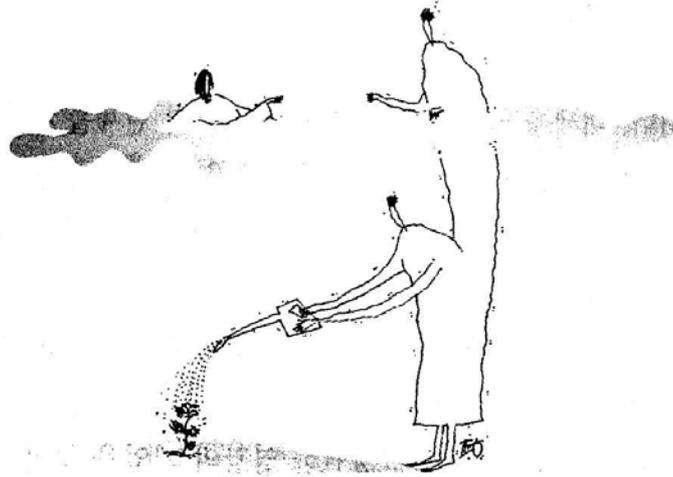
また、不作や火災、その他の様々な手段によって私たちを貧困に陥れたり、少なくとも不足を感じない程度の状態にとどめられたりもされるのです。私たちがこの世のはかない物質を愛しすぎないようにして、今、持っているものに頼りすぎないようにされるのです。またときには私たちが自分の結婚生活に執着して生きることがないようにと悪しき配偶者や不出来な子供を与え、あるいは愛する家族の死を与られて、私たちの心を苦しめられるのです。

このように私たちに予期できない病や災難を送られることでこの世の生活のよきものすべてが不確かなものであり、頼りのないものであることを私たちに明らかにされようとするのです。そのような十字架の訓練を通してこの世の生活の本質を悟り、またその価値を徹底して蔑むことがなければ、私たちは誰も自分の精神をもってやがて訪れる世界を瞑想し、それを仰ぎ望むことはできないのです。その訓練によって明るくされた目でこの世の生活を見るなら、この世界には本当の幸福を見出すことができないことを知らされるのです。この世の生活はゴールのない競争のようなもので、私たちがそこですることでできるものと言えば、死の時まで最善をつくして走り抜くよう努力するだけなのです。

それではもし私たちの生活に災難も挫折も苦しみも一切襲って来ないとしたら、私たちはどのようになってしまうでしょうか。十字架が無くても私たちはこの世の生活を執拗に愛することをやめることができるでしょうか。それは無理ではないでしょうか。私たちは今でも相次いで起こる災難で苦しみながらもこの世に生活に対する未練を簡単に捨てることができません。だからこそ私たちがもしこの世の生活の中で十分な幸福感を味わってしまっていたら、どうしてこの世の様々な誘惑に勝利することができるのでしょうか？

もちろん、私たちの生涯は煙のようで（詩編 102：4） 移ろう影のようなもの（詩編 102：12）だと言うことを世の有識者たちもよく知っています。しかし、そのような知識は葬儀場を抜け出すことができません。いったん、葬儀場の外に出れば人々はその言葉をすぐに忘れてしまうのです。だからこそ、人々はこの世の生活で最高の幸福と最大の善を見出すことができるかのように、この世のものに関心を抱き、それらに対する下品で愚かな愛情を献げてしまうのです。

中間地帯はありません。私たちはこの世を非常に無価値なものと考えるか、そうでなければ過剰な愛を抱くことになるのです。ですから永遠に対する関心が少しもないならば、私たちは持てる力を尽くしてこの世の生活に対する愛着という鎖を断ち切る必要があるのです。



第二節 この世の生活と来るべき世に対する正しい態度をもつことが大切。

来るべき世を正しく知ってこそこの世の生活を正しく見ることができ、この世の生活を正しく知ってこそ来るべき世を正しく見ることができると言えます。私たちが来るべき世を熱望するためには、まずこの世の生活を徹底的に軽視していかなければならないということはすでに語りました。しかし、どんなに私たちがこの世のものには価値がないと見なしたとしても、それらを憎んだり、それらによって神に感謝を捧げることを忘れてはいけません。私たちがそうしてはならない、いくつかの理由を挙げてみましょう。

まず、この世での生活も神が与えてくださる祝福の一つであるからです。実際にこの世での生活は信者たちの救いを助け、促進させるためにすべて貢献しています。神はやがて私たちに永遠の栄光に満ちた祝福を与えてくださいます。それによってご自分が私たちを救われる善き父であることを証明されよとするのです。しかし、神はまず今、この世でそれよりも遙かに小さな証言を通じて私たちにとってご自分が善き父であることを知らせようとするのです。これが私たちの日常生活を通して受ける神の恵みなのです。

また自然を見てみましょう。それはどんなによきもので満ちているでしょうか。この雄大で、すばらしい自然は私たちに日ごとに神に感謝を捧げるようにと叫び続けています。自然は私たちに向けられる神の慈しみ深き恩寵で満ちています。そしてさらにこの世の生活は来るべき世の栄光のための準備の過程なのです。神はやがて天で栄冠を与えようとする人々にまずこの地上での戦いを勝利するようにと定められているのです。また、私たちがこの世の生活で受ける様々な恵みを通じて神の愛と善を味わうようにされれば、結局、私たちは神の恵みが完全な姿で現れるときにさらに望みを抱くようにされるのです。このようにこの世の生活は私たちにとって重要な意味を持っていると言えます。

しかし、どんなにこの世の生活に意味があったとしてもそれは来るべき世での生活に比べれば取るに足りないものに過ぎずしないのです。この世の生活のすばらしさは私たちが来たるべき世の生活を知って、それと比べるときにその輝きを失います。天が私たちの故郷であるとすればこの世は流刑の場所であることは明らかです。この世を離れることが生命に入ることだとすれば、この世は墓場に過ぎないこととなります。ですからこの世を生きるということは墓に葬られた死体のように死の中につながれていることと同じであると言えます。

肉体を脱ぎ捨てるのが完全な自由を受けることだとすれば、肉体とは私たちにとって監獄以外のなにものでもないことになります。世を離れるときまで私たちは主と離れているとするなら（コリント二 5：6）主と一緒にいるこの世の生活は私たちにとって不幸せなものと言えるでしょう。このようにこの世での生活は来るべき世に比べれば確かに軽いものであり、不完全なものに過ぎないのです。

この世の生活は主が私たちを配置された戦いの前線基地のようなところでは、その場所での生活がどんなによくても悪くても、私たちは主の移動命令が下りるまでその場所を守らなければなりません（ローマ 7：24、14：8、フィリピ 1：23、24）。パウロのようにどんなに自分の死を願っていても、そのときについては主の決定にお任せし、日々、喜びと感謝で自分に与えられた義務を、最善を尽くして果たすことが大切なのです。ですから私たちは罪に染まりやすいこの世での生活を愛し過ぎることがないようにすべきなのです。

第三節 来るべき世を熱望すれば、死の恐怖に勝利し、揺るがされることのない慰めを受けることができる。

自分がキリスト者であることを誇るたくさんの人々が死を待ちこがれるのではなく、反対に死の恐怖に捕らえられ、死という言葉を目にしただけでもそれを不吉に感じていることは本当に情けないことではないでしょうか。もちろん死という言葉を目にするとき私たちの自然な反応は恐れを感じることは当然な反応です。しかし、キリスト者がそれよりもさらに大きな慰めと希望でその恐怖に打ち勝つことができなければ、語ることもさへ恥ずかしいことになるでしょう。死はそのような敬虔な信仰がなければ人間にとって耐え難いものとなるのです。撤退命令を受けた軍人が恐れ、悲しむ姿を見たことがあるでしょうか。監獄からついに釈放されて、嘆き悲しむ囚人を見たことがあるでしょうか。これから結婚しようとするのに悲しんでいる新郎新婦がいるでしょうか。朽ちていく肉体の天幕が解体されて、新しい永遠で栄光に満ちた天幕を着たいという私たちの希望は死に何も慰めを与えることができないのでしょうか（コリント二 5：2、3）。死によって私たちが流浪の生活から解放されて、喜びと幸せに満ちた故郷に帰れるという事実は、私たちの本性が最も恐れるその死をむしろ最も慕い求めるべきものにしているのではないのでしょうか。

獣や植物や石のような無生物までも自分たちの現在の状態を空しいものと感じ、復活の日を待ち望み、そのときに神の子供たちとともにその空しさから解放されることを慕い求めています（ローマ 8：19 以下）。まして理性の光と神の霊の照明を受けている私たちが死の恐怖を超越できないことがあるのでしょうか。

ですからキリストの学校で学びながらも、まだ自分の死と最後の復活の日を喜び持って待っていないとするならば、その人の信仰には進歩がないと結論づけなければなりません。パウロもこの事実に従って信者を区分しています（テトス 2：12、13；テモテ二 4：8）。信徒の死は主が信徒を喜びと祝福にあずからせるため与えられる聖なる手段なのです。それなのに、それが私たちむしろ苦しめ、迷わすようなものにすぎないと思えることは正しいことでしょうか（参照、詩編 116：15；テモテ二 4：8；黙示 21：4）。

そして信者たちはこの世にとどまる限り「屠り場に引かれていく羊」のようになることを避けることはできません。なぜならキリストもそのような者とされたからです。私たちもキリストに似る者としてそうならなければならないのです（参照、テモテ二 3：12；ヨハネ 15：19）。そして

私たちが目を高く上げて天にあるものを見つめことで、この世の生活でのすべてのものを超えていなければ悪人たちの栄えのために絶望に陥るか、そうでなければこの世の生活の財産や平安に慰めを求め、それを誇るようになってしまうでしょう（コリントー 15：19）。

私たちが悪人たちの悲惨な最期と私たちのために準備された来るべき世における驚くべき祝福をいつも忘れないようにしましょう。そうすればこの世の生活で会う様々な迫害や災難がもたらす苦しみに耐えることができるようにされるのです（詩編 73：3、4、17；イザヤ 66：24；マタイ 24：41；黙示録 7：17、21：8）。ですから来るべき世に対する希望は旅人のようにこの世を歩もうとする私たちすべてに唯一で最大の慰めとなるのです。

#### 結びの言葉

私たちはいつもカゲロウのようになろうとしています。明日のことを忘れて、今日だけに執着しようとするのです。もちろんこの世の生活は神の恩寵に満ち、それ自身にすばらしい意味が与えられています。しかし来るべき世における生活と比べるならばそれは煙や、移ろう影のようにはかないものに過ぎないのです。「明日楽しもう！」殿様バツタのこの言葉が理解できれば、今日に対する行き過ぎた愛着とそこで起こるすべての挫折と苦しみから私たちは解放たれることができます。カルヴァンが言うように私たちが毎日の生活で死を待ちこがれていないとするならばその信仰は真の信仰とはいえないのです。